

何とかなるとは言葉には 何とかするぞという強い意志が込められてる



マイナスをプラスに変えた分岐点

Interview

株式会社ケア21 代表取締役会長 依田平

株式会社ケア21の創業者であり、現在は代表取締役会長兼最高文化責任者(CCO)を務める依田平さん。塾経営から事業をスタートさせ、介護・福祉サービスを全国展開する総合福祉企業であるケア21を大きく成長させた。介護業界でもひと足早く定年廃止を打ち出し、働く人を大切にしている経営方針を貫くなど、介護業界の労働環境改善の道を先頭に立って切り開いたパイオニアである。そんな依田さんの心の支柱になっている信念とは……。

——人生に大きな影響を与えた出会いがあったとか。

今の僕を語る上で、小学校時代の恩師の存在は絶対に欠かせません。商売人の家系に育った僕は、小学4年生の作文で「株式投資でお金持ちになる」と書くような子供でした。そんな僕に担任の先生は「人は金儲けのためだけに生きるんじゃない。世のため、人のために生きるのが王道なんだよ」といつてくれたんです。常々「人間平等」を説いていました。とはいえ、当時の僕は何を綺麗事をいつているんだと、斜に構えて見ていました。

そんな思いが一転したのは、先生が身をもってその信念を示してくれたからです。私の郷里の長野には当時、根強い差別が残る地区がありました。先生はその出身ではありませんでしたが、下宿先の縁でその地区の女性と結婚するといいたんです。周囲は猛反対で、自分の子供がそんな先生に教わるくらいなら転校させるといふ父兄までいたくらい。しかし先生はそんな軋轢をもとせず、信念を貫いて結婚されたんです。その姿を見て、この先生は本物だと確信しました。僕の人生の指針が、単なる金儲けから「世の

ため、人のため」へと大きく舵を切った瞬間でした。

——前職で教育に携わったのは、「人のため」を意識して？

まずは、本作りを通じて社会貢献しようという出版社に入りました。ところが、その会社は超がつくくらいブラック企業(笑)。3年勤めて痛感したのは、自分の理想とは真逆だったということ。それならその対極にある超ホワイト企業を作ろうと、独立を決めました。当時は子供の本を作ったことがなかったので、まずは子供を深く知るために、塾を始めました。

——教育の現場で得た気づきは？

まずは誰でもやれば出来るということ。最初は3人だった生徒が、1年で100人に急増。成績が爆発的に上がるから、口コミで評判が広がったんです。理由はシンプル。まずは勉強の目的を理解させました。親や教師など周囲の大人は、いい大学、いい会社に入るためという打算を子供に押し付けがちですが、それは勉強の本質ではない。勉強、知ること世界を広げ、人生を豊かにするためにやるんです。そ

して、多くの選択肢の中から未来を選べる自由を獲得するためです。学力があれば行きたい道を選べるし、自由と選択肢が増えることだと教えると、心から納得してくれました。

もうひとつは、自主的な質問を引き出すこと。質問し易い空気を作る一方で、あえて「問題が解けるまで帰さない」というルールを設けました。20時に帰る子、21時に帰る子……がいて、最後まで残るのは、質問するのが嫌で粘っている勉強が苦手な子ばかり。それでも妥協せずに帰さないでいると、やっとわかりませんと手が挙がりやす。帰りたい一心でもじもじしている場合じゃなくなるんですね(笑)。

質問に対して教えてあげてことを繰り返すうちに、次第に質問の要領を理解して、帰宅時間は早まり、結果的に成績は一気に伸びていきました。質問することがどれだけ効率的かを、身をもって知るわけです。

——教育から福祉事業に舵を切ったきっかけは？

塾をやっている間、心には常に「世のため、人のため」というキーワードがありました。もっと世のためになる仕事はないかと探した時に、福祉だとはあったので、まずは福祉と教育を繋げるために、介護福祉士の専門学校を

作りました。最初に人材を育てて、

1999年に会社を立ち上げ、翌年から介護の世界に入りました。

当時、資格を取得したばかりで、現場に出た方は、実際にどう動けばいいのかわからないという実践的な知識を渴望していました。ケア21は、立ち上げた最初から上場を目指して、世の中に掲げたキャッチコピーは「介護事業は教育事業」。これが働く方にも利用者さんにも響いたんです。しっかりと教育を受けた方が見てくれるという利用者側の安心感と、きちんと教えてもらえるという働く側の安心感——その両方がマッチしました。

起業する際、既存の社会福祉法人を研究しましたが、彼らは「利用者本位」とはいいますが「従業員本位」とはいわない。その上、当時は定員が埋まると、収益が頭打ちになるため、給与が高いいベテランを、給与の低い新人に入れ替えて収益を維持しようとする風潮さえありました。スタッフを大事にしないんです。

でも、介護の質はスタッフの質あってこそ。スタッフの心を温めてあげなければ、心の通ったケアは出来ません。だから、僕たちは、経営理念の第一に「人を大事に、人を育てる」を掲げてスタートしたんです。最初の就職先である超ブラック企業での経験が反面教師的に役に立ちました。

——一番喜びを感じることは？

人の生き甲斐は「貢献と成長」だと思います。ケア21でいえば利用者様に尽くすことで「貢献」は出来ますが、「成長」を実感出来た時に、生きていてよかったと思えるんじゃないでしょうか。塾を経営していた時も今も、スタッフが成長する姿を見ることが、僕の一番のやり甲斐であり喜びです。

ケア21では昇格を「挑戦」と呼び、降格は「充電」と呼んでいます。降格させられて挫けて辞めるのではなく、もう一度学ぼうと頑張った結果、再び挑戦の舞台に戻ってくるスタッフの姿を見ると、本当に嬉しいですね。

——今までを振り返って、大変だったことは何ですか？

実は、塾は相当儲かっていて、いい気になって、フェラーリやポルシェを乗り回していたんですよ(笑)。ところが、大失敗をして資金繰りが苦しくなり、クルマを全て売り払う羽目になりました。それまでは経営者の集まりがあると、会場に高級車で乗り付けていたのが、一転して自分だけ軽自動車。知り合いに見られるのが恥ずかしいので、遠くの駐車場に停めて、会場まで歩きました(笑)。

——心の支えになったことは？

僕を支えてくれたのは、母から譲り

——読者にメッセージを。

人は何歳からでも成長出来るはず。だから、ケア21には定年がありません。高齢者の可能性を信じて介護をしている僕たちが、年齢で限界を決めるのは違うと思うからです。

僕は去年、72歳で保育士の試験に合格しました。学生時代から取りかかった憧れの資格ですが、ピアノの試験が緩和されたのを機に挑戦したんです。72歳でも合格出来るし、資格を取っただけじゃなくて、現場の役に立ちたいと思っています。

皆さんにも年齢を理由に諦めたりしないで、常にチャレンジして欲しいです。例えば、皆さんが退院した後……：仮に60代や70代の方であっても、ケア21なら僕と一緒に働く可能性だってあるわけです。保育園も介護施設も障害者施設もあります。僕は、皆さんの挑戦をいつでもお待ちしています。可能性は無限ですから。